

「群像」を書くことの可能性 —高森論文（2022）へのリプライ—

宮前 良平*

The Possibility of Writing a "Group Portrait" Reply to Takamori Article (2022)

MIYAMAE Ryohei

論文要旨

本稿は2022年に公開された『群像』が消失したアクションリサーチ：宮前良平（著）『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会』を考える」（高森 2022）（以下、コメント論文とする）へのリプライである。コメント論文において、二つの点が指摘された。一つは事実誤認の疑いについて、もう一つは「群像の消失」と名された問題である。上記二点について、指摘のあった書籍の著者としてリプライを行った。まず事実誤認の疑いについては、承認のプロセスが不十分であったために単声的な記述になっていた点に問題があったことを回答した。また、「群像の消失」については、研究介入によって現場のベターメントが得られたことを示そうとしたという力学が働いたことを認めつつ、ボランティアとしてともに活動した仲間を書くことの躊躇についても触れた。最後に、現場の現場らしさを記述することが最終的に書くことの権力性の問題につながる可能性について論じた。

キーワード 群像の消失、現場らしさ、アクションリサーチ、オートエスノグラフィ、チームエスノグラフィ

* 福山市立大学都市経営学部講師；r-miyamae@fcu.ac.jp

1. 本稿が書かれるに至った経緯

本稿は2022年に公開された『「群像」が消失したアクションリサーチ：宮前良平（著）『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会』を考える』（高森 2022）へのリプライである。なお、以後特に断りのない限り、2020年出版の宮前良平（著）『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会』を「当該著書」、2022年度公開の『「群像」が消失したアクションリサーチ：宮前良平（著）『復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会』を考える』（高森 2022）を「コメント論文」、そしてこの研究ノートを「本稿」とする。

本稿に関連する時系列を簡単にまとめよう。当該著書は2018年末に提出された博士論文「復興過程における〈かつてあったもの〉のグループダイナミックス」をもとに大幅な加筆修正を行い2020年12月に大阪大学出版会から刊行された。その後、2021年1月24日にコメント論文の著者である高森氏から本書の内容についてZoomで話せないかとメールがあり、Zoom上で当該著書に関する議論が行われた。当該著書を詳細に読み解いていただいた高森氏からの批判は、著者として首肯するばかりで、今後の研究の方向性までも相談に乗ってもらうなど極めて生産的であり、数時間に及ぶ議論があつという間であった。しかしながら、その後何度かメールなどでやりとりを重ねる中で、私が十分な応答ができなかったこともあり、議論は停滞し、当該著書の記述について互いの認識の差が浮き彫りとなっていった。コメント論文の草稿が私に共有されたのは2021年12月7日である。その際に、当該著書に登場する複数の方からの当該著書の誤った記述についての指摘を伝言していただいた。そこには、出版の前に十分な確認がなされなかったことへの落胆のメッセージが付されていた。その指摘を重く受け止めた私は2022年1月26日に連絡の取れたお一人の方のもとに直接お詫びに伺い、当事者間で和解した。そして、2022年3月に先述のコメント論文が公開された。

コメント論文では、当該著書に対して大きく2つの批判がなされている。1つは、著者である宮前が明らかな事実誤認をしているという点である。これはおもに当該著書内の「コラム くろじいと約束、そして物語について」

内での記述に対するものである。もう1つは、当該著書のエスノグラフィ全体に対する批判であり、具体的には現場でのやりとりの記述が非常に少ないというものである。このような記述のあり方をコメント論文では「群像の消失」と表現している。本稿ではそれぞれについて、当該著書の著者たる立ち位置からリプライを行うことを目的とする。また、コメント論文が指摘する群像の消失という問題を深く受け止め、いかにすれば群像の記述が可能となるのかを考えていきたい。

本稿はリプライ論文という体裁を取っているため、すでに当該著書やコメント論文で登場している語句を断りなしに用いている。そのため、本論に入る前に簡単に背景を説明しておきたい。私は、東日本大震災の被災地の一つである岩手県九戸郡野田村で活動するチーム北リアス写真班のメンバーの一人として野田村の復興過程に携わってきた。チーム北リアス写真班とは、隣県青森県八戸市のボランティアを中心に結成された写真洗浄・返却を行うボランティアグループである。写真洗浄とは、津波で流され汚れた写真を洗浄する活動のことであり、写真返却とは、洗浄した写真の持ち主を探し写真を返却する活動のことである。写真返却の際に、私たちチーム北リアス写真班は、お茶とお菓子をお出しし、写真を探す被災者の方々の思い出話をゆっくり伺う時間も大事にしている。そのため、私たちは写真返却会を「写真返却お茶会」と呼んでいる。当該著書は、私がチーム北リアス写真班のメンバーとして「写真返却お茶会」にかかわる中で見聞きしてきたいくつかの事例をもとに復興と記憶の関係について論じている。

2. 当該著書の事実誤認について

コメント論文では、当該著書における事実誤認の指摘がなされている。具体的には、当該著書 168 ページから 172 ページにかけて掲載されているコラム「くろじいと約束、そして物語について」内に事実誤認とみられる箇所が散見されるとの指摘である。本章ではまず事実誤認についての指摘を整理し、それに対する私からのリプライを寄せたい。

なお、ここでは、どちらの言明が「真実」であるかという点では争わない。なぜならば、「羅生門問題」（詳細は後述）としても知られているように、2

つの言説が食い違ふときに、それらの言説を見比べるだけではどちらが真実であるかは決定しがたいからである。したがって、本章では真実を確定させることを目的とするのではなく、なぜ証言の食い違ひが問題として俎上に上げられるのかに焦点を当てたりプライをしたい。

まずコメント論文が指摘するのは、「夜の海は、色彩がほとんどなく、ひたすらに無音」という当該著書の記述である。この記述は、私が塩釜港の沖合から花火を見る直前の状況を表したものである。しかしながら、コメント論文が指摘するのは、当日の塩釜港は「第 69 回塩竈みなと祭」の前日で、「前夜祭花火大会」が行われており、現地は色彩がないわけでも無音でもなく、きらびやかで騒がしかったはずだということである。それに伴い、私が花火の打ち上げを知らなかったかのように記述してある箇所も、花火が上がることを知らなかったはずがないと指摘する。

当日の夜の海が暗かったかきらびやかだったか、無音だったか騒がしかったかを今この段階で判断することはできない。当日の写真を示すこともできるが、画像の暗さはカメラの性能のせいかもしれない。たしかにコメント論文が指摘するように当日の港にはいくつかのクルーズ船が出ていた。しかし、それでも花火が打ち上がる直前は、そういった電飾も必要最小限の程度にまで落とされ、みなで息を呑んで打ち上げを待っていたことを私は覚えている。小さなエピソードを一つ挟めば、花火の打ち上げ中に上空に一体のドローンが舞っており、その明かりさえも邪魔に感じられるくらいには暗闇であった。

しかし、このような反論は記憶の不確実さをめぐる水掛け論に陥るだろう。いずれにせよ、私の記述はどこまで行っても「私にとってはそのように感じられた」ものでしかない⁽¹⁾。

したがって、事実誤認についてではなく、承認のプロセスが不十分であった点にこそ非があったと考える。端的に言えば、公刊する前に、ともに花火を見た方々に原稿を共有し確認していただくステップが不十分であった。もしも、事前に原稿を共有していれば、あ那时的記憶についてさまざまな語り新たに生み出された可能性もある。そういった必要なプロセスを十分に取ることなく、著者である私一人の記憶として書き、そのまま掲載してしまった。その点に私の至らなさがあった。

先述の通り、高森氏から 2021 年 12 月 7 日に送られたメールにおいて、

当該箇所以外の複数の点で私の不確認による事実誤認の指摘が寄せられていることを知らされた。それは本コラムとは別の箇所であり、一部は論文としてすでに公開されていた。その論文を書き上げた際には、登場する方に原稿を確認していただき問題ない旨を聞いていたのだが、こうした形で事実誤認を複数指摘されたとあっては、確認が不十分であったと言わざるをえない。事実誤認を指摘してくださった方々には、即座に私からお詫びの手紙を出し、連絡の取れた方にはその翌月に直接お詫びに伺っている。その際に、版元である大阪大学出版会のページ上に本文の訂正について掲載する旨を申し出た。しかし、そんな私の申し出に対して、その方は優しく和やかに「もう分かった」と一言だけ声をかけてくださった。

こういった経験を通して私が感じるのは、私を主語にして私の記憶を書いた文章であっても、私一人の所有物ではないという、言葉にしてみれば当たり前のことである。あなたの書いたことは事実かと問われれば、私にとっての事実ですとしか答えることができない。しかし、その「私にとっての事実」が、関係する方々からの承認を得られているかどうかは、事実がどのようなものであるかとは別の次元で極めて重要である。

一つの事実に対して相容れない複数の証言がなされることを、黒澤明監督の映画になぞらえて「羅生門問題」と呼ぶことがある。たとえば裁判において、証人 A と証人 B が食い違った証言をするとき、どちらが正しいかを判断するのは容易ではない。ここで前提とされているのは、真実は一つしかないからその一つしかない真実を突き止めようとする真実追求モードである。しかしながら、この前提を取り外し、私にとっての真実やあなたにとっての真実が並立する状態を構想することもできる。その際に必要なのは、あなたにとっての真実もまた疑いようのない真実であるということを確認するプロセスである。こうした承認のプロセスがあってはじめて、「多声性」が生まれるのだと思う。当該著書における私の記述には、この承認のプロセスが十分ではなかった。それゆえ、私の記述のみが正しくて、それ以外は間違いとして切り捨てるかのような単声的な論述となっていた。この点について、深く反省している。

3. 群像の消失について

コメント論文は「群像」というキーワードを核に置いて論じている。ここで言う「群像」とはどういった意味合いなのかをまずは確認したい。コメント論文は当該著書には「現場の当事者間の集会的なやりとりがほとんど見られない」(p.242)と指摘する。それは、当該著書に描かれたエスノグラフィにおいて、チーム北リアス写真班を対象としているにも関わらず、取り上げられるのは著者である宮前の行為や思考ばかりであり、現場で写真班のメンバーがそれぞれどのようにふるまっていたのかが記述されていないという指摘である。

くわえて、上述した事実誤認の指摘を経てコメント論文は、当該著書の問題点として群像の消失を論点に上げる。つまり、フィールドノートには記述されていた写真返却お茶会という場における群像が、エスノグラフィになったときになぜ消失してしまったのかを考察する。そこでコメント論文が注目するのは、当該著書の理論的支えとなっているアクションリサーチという研究姿勢である。

アクションリサーチとは、コメント論文の言葉を借りれば「研究者が現場に介入し、当事者とともに 現場の変革を目指す研究スタンス」(p.248)である。その際の変革とは、一言で言えば、現場をより良くすることである。コメント論文はここに群像の消失の理由を見いだす。つまり、著者である宮前は、研究介入が現場をより良く変革したということを証明しようとするあまり、現場のベターメントに直接関わらない枝葉末節を取り除いてしまったのではないかとの指摘である。コメント論文では、こういった状態を「現場の縮減」(p.249)とも表現する。現場ではさまざまな出来事が起きる。しかしながら、研究によって現場が変革したケースを取り出し、そうではない部分は取り除くことで、現場がアクションリサーチに資するための「現場」としてしか記述されないという指摘であると理解した。

このような理解において、私は私の研究実践の至らなさを反省するばかりである。研究成果を出すことに焦りがなかったかと言われれば、無かったとは決して言えないし、論文化する際に現場のダイナミズムを「縮減」しなかったかと言われれば、ある程度は戦略的に「縮減」してしまったことは認

めざるをえない。それは大部分においては、論文化する際の目的設定にしたがって、それに沿う形でエスノグラフィを寄せ集め、文字数制限と闘いながら、真に明らかにしたいことを求めてきたことに起因する。なお、コメント論文では「事実と異なる記述さえ生じるに至ったのではないか」(p.249)と推察されているが、先述のような事実誤認があり得たことは認めるが、意図的な創話や虚偽は一切ないことははっきりさせておきたい。

その上で、コメント論文での群像の消失に関する指摘が主にチーム北リアス写真班のメンバーについてなされていることは確認しておきたい。つまり、写真返却お茶会に参加し、被災写真を見たり、思い出話をされたりした野田村の方々については、不十分であるにせよ、記述しているのである。群像が消失したのは、主には野田村で被災した方々ではなく、私と同じ立場で実践してきたチーム北リアス写真班のメンバーである。

なぜ、チーム北リアス写真班のメンバーについての群像がエスノグラフィに記述されなかったのか。答えの一つとしては、当該著書が主に「被災された方々一人ひとりにとっての思い出、記憶、想起とは何か」(宮前 2020:11)について論究したものであるからと言うことができる。つまり、ボランティアではなく、被災された方々に主眼を当てた研究だったからである。ボランティアの現場でのふるまいは「縮減」してしまったが、野田村の被災者の方々のふるまいや語りは、十分ではなかったにせよ、できる限り「縮減」しないように努めたつもりである。

もう一つの答えとして、一種の同一化があったことも書き留めておきたい。それは、私がつねにチーム北リアス写真班のメンバーとして現場に身を置きながら書いたエスノグラフィゆえに、チーム北リアス写真班のメンバーたちを現場にいつもいる存在として後景化し、エスノグラフィにあえて登場させるようなことをしなくなってしまった。現場のそのままを書こうとしても、たとえば森の木々の一葉一葉を記述することはできない。写真返却お茶会でよく使用していた生涯学習センターの壁のシミをいちいち記述することはできない。そういった存在として、写真班のメンバーを不可視化してしまっていたことは否定できない。それに関連して言えば、活動を続ける中で、ボランティアはあくまで復興の脇役にすぎず、主役は村民であると考えてきたため、復興について書く際にボランティアについて紙幅を割くことが若干憚られたということもないわけではなかった⁽²⁾。

4. 群像を書くことの困難さと可能性

それとは別に、群像を記述することの困難さもまた感じていることを白状したい。コメント論文では、群像を記述することが、研究者が素朴に想定する「現場らしさ」から脱却することにつながると述べられる。つまり、現場らしくないもの（たとえば、現場への馴染めなさや居場所のなさ、乗り切れないもの）を、研究の目的から外れるものとして捨象するのではなく、そういったものをも含む群像として記述し、それによって『「現場らしさ」の仮設と解体を繰り返し、素朴な現場理解からの脱却』（p.251）が図られる。コメント論文の指摘は正鵠を射ている。しかし、そのような群像がコメント論文の指摘どおりに書かれたエスノグラフィを想像したい。現場らしくなさを含む群像を含んだエスノグラフィは、ややもすると、「現場らしさの仮設と解体」という筆者の思惑に落ちてしまっていないだろうか。言い換えれば、「現場らしさの仮設と解体」という研究志向に資するために、「現場らしくないものの群像」がいわばメタ的に利用されることになってしまわないだろうか。どういった題材をエスノグラフィとして採用するかは、最終的に筆者の選択にかかっている。

ここで議論すべきは、書くという特権を持った研究者が現場の群像を記述することがいかに可能かという点であるように思う。コメント論文の指摘は、単に「現場らしさ」をめぐる問題にとどまらず、「書くこと」にまつわる普遍的な議論が喚起されていると考える。であるからこそ、書くことの特権が書かれる側に対する暴力性として発現することの問題にも向き合わなければならない。「群像」はつねに、「書き手にとっての群像」として表象されるのだから。

さて、著者としても当該著書を上梓したあとに、書くことに関するいくつかの実践を行っている。その一つがオートエスノグラフィである（宮前・藤阪・上總・桂 2022）。オートエスノグラフィとは、研究者によってさまざまな定義がなされているが、さしあたり自身の経験や記憶について自分で書くエスノグラフィのことである（e.g. 桂・千葉 2021）。とはいえ、当然のことであるが、オートエスノグラフィは自分のことのみを書いているわけではない。そこには他者も登場する。しかしながら、他者がただ登場するので

はなく、他者について書いている私のポジショナリティを明らかにした上で、他者を書くという点にオートエスノグラフィの特徴があるように思う（宮前ほか 2022）。このように、書き手というポジショナリティを明らかにすることが、群像を書くことの前提になるのではないかと考える。

もう一つの実践はチームエスノグラフィである（宮前・置塩・王・佐々木・大門・稲場・渥美 2022）。チームエスノグラフィとは、その名の通りチームで、つまり複数人で書くエスノグラフィのことである。先行研究においては、チームとは暗黙のうちに研究者集団のことを指していた。しかし、本稿での議論を経て考えると、チームとは単に研究者集団のみならず、読者をも含めたより広範な集合体として構想し直す必要があるだろう。つまり、これまで書き手とは研究者のことであった。しかし、今後はエスノグラフィに登場した人物もまたエスノグラフィの書き手として、エスノグラフィに参加するというあり方も求められるだろう。このような、登場人物もまた読者も書き手となるようなエスノグラフィが可能になったとき、書き手という権力は分散され小さくなっていくのではないだろうか。そして、みなが自らの経験や記憶を書くということは、自己についての記述であるオートエスノグラフィックな群像が可能となることをも意味する。技術的な障壁があるにせよ、このようなチームエスノグラフィ=集合的オートエスノグラフィは、コメント論文が指摘するような、研究という限られた営為にとどまらないエスノグラフィが可能のひとつになるのではないかと思う。

注

- (1) コメント論文においては、当該コラムはフィクションか否かという観点からの議論も挿入されている。私としては当該コラム私にとっての事実をもとに自由な連想をつないだ散文というつもりで書いた。それゆえ掲載の際には「エスノグラフィ」ではなく、「コラム」という形式を取った。
- (2) とはいえ、当該著書の目的である「被災された方々一人ひとりにとっての思い出、記憶、想起とは何か」（宮前 2020:11）を明らかにするためには、写真返却お茶会という場の複雑なダイナミズムを正確に記述し理解することが必要だったのではないかというコメント論文の指摘は極めて重要である。場のダイナミズムが想起に与える影響は私の仕事の中でもいまだ非常に不足している部分である。

参考文献

- 桂 悠介・千葉 泉 2021 「人間科学における「喚起的」記述の意義と課題：オートエスノグラフィー、「自分綴り」の実践から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』47:185-203。
- 高森 順子 2022 「「群像」が消失したアクションリサーチ：宮前良平「復興のための記憶論—野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ」を考える」『共生学ジャーナル』6:240-253。
- 宮前 良平 2020 『復興のための記憶論：野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィ』 大阪大学出版会。
- 宮前 良平・藤阪 希海・上總 藍・桂 悠介 2022 「「サバルタンは語ることができるか」を共に読み共に書く：共生学の3つのアスペクトを中心に」『未来共創』9:243-275。
- 宮前 良平・置塩 ひかる・王 文潔・佐々木 美和・大門 大朗・稲場 圭信・渥美 公秀 2022 「実践としてのチームエスノグラフィ」『質的心理学研究』21(1):73-90。